

台灣の近代化に尽くした土木技師

八田與一



八田與一

はった・よいち——明治19(1886)年現在の石川県金沢市に生まれる。東京帝大工科大学土木科を経て台湾総督府土木部技手を拝命。現地調査を元に嘉南平原の灌漑事業に取り組み、当時東洋一の規模を誇る烏山頭ダムを核とする嘉南大圳を建設。その後も各地のインフラ事業に精力的に取り組む。昭和17(1942)年5月8日東シナ海にてアメリカ潜水艦の魚雷攻撃を受け死去。享年56。

ふるかわ・かつみ——昭和19年愛媛県生まれ。42年愛媛大学卒業。教職に就く。55年文部省海外派遣教師として台湾省高雄日本人学校に3年間勤務。平成3年『台湾を愛した日本人』で土木学会著作賞受賞。その後、松山市内の中学校長を歴任し、定年退職後も台湾に縁のある日本の偉人について執筆、講演活動を展開。著書に『台湾を愛した日本人』(創風社出版)などがある。



古川勝三

「八田技師夫婦を慕い
台湾と友好の会」顧問

海外での日本の評価は、私たちが想像する以上に高い。それは海を越えた異郷の地で活躍した先人たちの功績に負うところも大きいが、いまの学校教育ではその貴重な事実がほとんど語られていない。台湾のインフラ整備で多大な実績を残した八田與一もその一人である。知られざる土木技師の足跡を追い続けてきた古川勝三氏に、私たち日本人が取り戻すべき生き方を交えてお話ししていただいた。

—— 海外から好意を抱かれている日本

先の東日本大震災直後、日本は各国から様々な援助の手を差し伸べていた。その中で総額二百五十億円という世界でも最高額の民間義援金を贈ってくれたのが台湾であった。

日本との正式な国交がなく、人

口も僅か二千三百万人にすぎない台湾が、なぜここまで手厚い支援をしてくれたのか。

昨年二月に台湾で実施されたアンケート調査によると、世界で一番好きな国は日本と答えた人が全体の四十一割を占め第一位（第二位のアメリカは四割）、世界で最も親しみを感じる国は日本と答えた人は七十四割にも上ったという。なぜ台湾の人たちは、かくも熱い差しを我が国に対して送ってくれるのだろうか。私は概ね四つの理由があると考える。

一つは、一九九九年の大地震や二〇〇九年の台風で台湾が大きな被害を受けた際、日本の救援隊が直ちに駆けつけて救助活動を行い、義援金を贈ったことが挙げられる。二つ目は、毎年日本から台湾へ訪れる旅行者が約百三十万人、同じく台湾から日本へ訪れる旅行者が約百十五万人にも上り、民間の交流が大変活発であること。これら者のマナーのよさを通じ、日本の高い民度に好感を持たれていることが挙げられる。

そして私がいま一つ挙げたいのが、かつて日本が台湾を統治して

いた時代に、現地のインフラ整備に尽くした日本人が多数いたことである。

八田與一、「嘉南大圳の父」と謳われる土木技師もその一人である。

守り続けられている 日本人像

私が八田與一の名を初めて耳にしたのは現職時代の昭和五十六年、海外日本人学校の派遣教員として赴任していた台湾の高雄日本人学校の卒業式であった。

「日本人技師の銅像が、たった一

つだけ嘉南の人たちの手で現在も守られていることを、皆さんは知っていますか。皆さんは将来、外國で活躍するようになるかもしれません、この日本人技師のよう

くられ不思議に思っていた。

思えば私の台湾に対する先入観は、自分の受けた戦後教育によって培われたものだった。昭和十九年生まれの私は、日本人は戦前アジアで悪いことばかりしてきたという考えがすり込まれていたのである。

出田所長のお話を伺ったのは、高雄事務局の出田政夫所長が祝辞で述べられた八田技師の名は、私の脳裏に深く刻み込まれた。

実は、海外赴任を希望して試験を受けた時、私の中では日本の軍人があなたに進出してきたところに行かされ、珊瑚潭という美しい人造湖に何をされるか分からぬ

という危惧があった。そこで面接では、赴任先としてフランスに統治されていたケニアのナイロビを希望したが、意に反して台湾とな

った経緯がある。

台湾といえば日本が戦前、五十年にもわたって統治していたところである。情けない話ではあるが、

その時は日本人の自分にはものも売ってもらえないのではないかと案じ、大量の荷物を抱えて現地入りした。ところが現地の人々は、日本人の私を見ると親しげに話しかけてくるし、とても親切にして

くれ不思議に思っていた。

思えば私の台湾に対する先入観は、自分の受けた戦後教育によって培われたものだった。昭和十九年生まれの私は、日本人は戦前アジアで悪いことばかりしてきたという考え方すり込まれていたのである。

出田所長のお話を伺ったのは、台湾の人々の態度を通して自分が受けた教育に強い疑念を抱き、自ら歴史書を紐解いて勉強を重ねていた折でもあつたため、とりわけ印象に残ったのだった。

その後、台湾の友人に誘わ

連れていくてもらう機会があった。その湖は、八田與一によって造られた烏山頭ダムによって生成された湖だという。出田所長の話を思

い出した私は、地元の人に道順を探し当てた。

「嘉南大圳設計者 八田與一氏像」こう刻まれた低い台座の上には、作業服に身を包んで地べたに腰を下ろし、頭髪に手をやりながら工事の進捗を見守る八田與一の銅像

があった。

驚いたのは、銅像の後ろにあった八田夫妻のお墓である。建立は中華民国三十五年十二月十五日である。これは昭和二十一年であり、日本が敗戦によって台湾を放棄し、大陸から押し寄せてきた中国軍によって日本人縁の建造物が次々と破壊された時期である。八田夫妻のお墓は、まさにその時期に、しまさに台湾にはない御影石をわざわざ調達して造られている。私は体中に震えが走るほどの興奮を覚えた。ここまで台湾の人々に大切にされた八田與一とはいかなる人物か。以来三十二年、私はこの稀有

なる人物の事跡を辿り続けてきた

生き方

特集

豪農であった八田の実家には、毎月真宗の高僧が訪れ地元の人々に説法を行っており、八田もそれを聞いていたはずである。仏の前では人は皆平等という考えが心に深く刻み込まれていたことが、日本人も台湾人も分け隔てなく遇しようとする彼の人間性のベースとなっていたことは間違いないだろう。

人も台湾人も分け隔てなく遇しようとする彼の人間性のベースとなっていたことは間違いないだろう。

不撓不屈の精神の源

前例のない大事業ゆえに、八田の前には次々と大きな試練が立ちはだかった。

曾文渓からのトンネルを九十日まで掘り進めた時、地中の石油ガスに引火して爆発事故が起き、日本人、台湾人併せて五十数名の作業員が死亡した。

部下思いの八田は懲り、もう工事はやめると言い出した。台湾総督府の中からも、あんな若造には端から無理だったのだと非難する声が次々と上がった。

しかし、亡くなつた作業員の家族から、ここでやめたら死んだ人間が浮かばれない。やると言つた限りは是が非でも完成させてほし

つた影響も大きいと私は考える。

いと嘆願され、八田は再び奮起した。

八田は工事の竣工後、「殉工碑」を建て、そこへ工事中に殉職した人々の名をすべて刻んで慰靈に努めた。工事の犠牲になつた人々のことを片時も忘れるとはなかつたのである。

工期中に日本で起きた関東大震災も大きな試練となつた。予算を大幅にカットされ、作業員を半分の五百人にまで減らさなければならなくなつたのだ。

この時の八田の対応が非常にユニークだったのは、彼が優秀な人間から解雇していくことである。八田はかねて、大きな仕事は少数の優秀な者より平凡な多數が成すと考えていた。そして優秀な人間を歩き続けたことなども、八田の苦楽をともにしてきた部下たちに断腸の思いで解雇を言い渡した。

部下たちに退職金を渡す八田の頃は、涙に濡れていたといふ。彼は解雇した部下を決して放つておくことなく、全員により報酬の高い働き口を斡旋し、予算復活後、工事に戻りたい者はすべて受け入れた。

こうした様々な苦難を乗り越え、

着工から十年を経た昭和五（一九三〇）年、今日の金額にして総額

七千億円近い巨費を投じた工事は遂に竣工した。

困難を乗り越えて大事業を成し遂げた八田の不撓不屈の精神の源。

それは、先述した真宗の教えがベ

ースにあつたことに加え、実家が農家であったことも大きいと私は思う。農家はどんな天災に見舞わ

れようとも、農作業に従事し続けなければならない。諦めればそこ

ですべてが終わりであるという考

えが、先祖から受け継いだ血を通じて本能的に刻み込まれていたに違いない。加えて、盲目になつた父親を助け、幼い頃から家のため勤勉に働いたことや、学校に通うた毎日往復十二キロもの道のりを歩き続けたことなども、八田の

並外れて強固な意志の背景にあると私は思う。

完成したこの灌漑施設は、その巨大さゆえ「嘉南大圳」と命名された。五月十五日に通水式が行われ、烏山頭ダムから全水路に水が行き渡るまで実際に三日を要したと

た。そして十五万石の大地を潤す水を目にした嘉南の農民たちは、

「神の恵みだ。神の与え賜うた水だ」と歓喜の声を上げた。この通水により、不毛の大地だった嘉南平原は僅か三年で台湾最大の穀倉地帯へと生まれ変わった。八田は「嘉

南大圳の父」として地元の人々の心に永遠に刻まれることとなつたのである。

工事に携わった人々が淨財を募り、八田の銅像を建立しようとした際、八田はこれを固辞した。し

かし作業員たちから、皆が力を合

わせ、十年もの歳月をかけてこの大事業を成し遂げた証として、ぜひ建立したいという強い要望を受け、高い台座の上でふんぞり返つ

ているものだけは絶対につくらないうことを条件に承諾したという。

八田はこの大事業を成し遂げた功績により勅任官となり、引き続

き大甲渓の開発等を手掛けるなど、現地のインフラ整備に力を尽くし

た。そして昭和十七（一九四二）年五月八日、フィリピンの綿作灌

溉調査を陸軍から命じられ、字品

から大洋丸に乗船して現地へ向か

う途中、アメリカの潜水艦グレナディア号から魚雷攻撃を受け大洋

生き方

特集 生き方

八田與一の生き方は、戦前の日本をすべて悪とする自虐史観に一石を投ずるものである。

八田與一の生き方は、戦前の日本をすべて悪とする自虐史観に一石を投ずるものである。



珊瑚潭を見守る八田技師の銅像と墓碑

嘉南大圳ばかりではない。日本人は満州や朝鮮のインフラ整備にも多大な資本と技術力をつき込み、現地の近代化に貢献している。

これらの実績に対し、彼らが働いたのは日本の利益のためであり、現地の人々のためではないと否定的な見方をする向きもある。

しかし、日本人がもたらした恩恵は、それを受けた現地の人々が何より深く理解している。

ところが私が受けた戦後教育は、そうした尊い光の部分に蓋をし、影の部分ばかりを強調して教えてきた。マスコミの報道姿勢も同様である。

こうした自虐的な教育や報道から、心豊かで世界に貢献する誇りある日本人は決して育たない。

その義憤が、多忙な教職の傍らで八田の足跡を綴る原動力となり、多くの方々のお力添えを得て、自

著『台湾を愛した日本人——土木技師 八田與一の生涯』(創風社出版)へと結実した。出版した当初

「日本精神」の復活を願つて

その三年後、烏山頭に疎開していた妻の外代樹が、ダムの放水口に身を投げたのは、終戦を迎えた直後の九月一日未明のことであった。享年四十五の若さであった。

八田與一の生き方は、戦前の日本をすべて悪とする自虐史観に一石を投ずるものである。

いう学校からの要請を受け、多くの教員の方々の前で八田の生き方をお話しさせていただく機会にも恵まれている。

私が八田の生き方を通じて最も訴えたいことは、かつて日本人が大切にしていた公の精神を取り戻してほしいということである。

日本人は明治維新を成し遂げて近代化のスタートを切り、僅か七十年後には巨大戦艦や零戦を造るまでの技術と国力を身につけた。

その目覚ましい躍進の原動力になつたのは、私を後にし、公のために尽くした明治の人々の生き方である。

八田をはじめ、大事業を成してきた人物に共通するのは、それらを決して己のためでなく、民衆の幸せを願つて行ったことを銘記しなければならない。

ところが戦後、こうした先人の尊い生き方を含む日本の歴史や文化が十分に伝えられなくなつた。その代償として、自己の責任や義務を後回しにし、ことさらに己の権利ばかり主張する風潮が蔓延。日本人としての誇りがすっかり失われてしまった。

私は今後も現地の民衆のために生きてきた土木技師・八田與一の生涯を通じて、日本の先人が貫いた素晴らしい生き方を、将来を担う若い人々に語り続け、第二、第三の八田與一が育っていくことを願つてやまない。かつて、貧しくとも誇りを持って公のために生きていた日本人の姿こそが、今日でも全世界の人々に求められている

八田與一の事跡を取材中、台湾の方からこう言わされたことがある。「古川さん、あなたは日本人だから『日本精神』を持っていますよね。日本精神を持っているあなた方日本人を、私たち台湾人は心から尊敬しています」

日本精神。恥ずかしながら私はその意味を知らなかつた。

日本精神とは、嘘をつかず、不正なお金を受け取らず、己の失敗を人のせいにせず、卑怯なことをせず、己のやるべき仕事に全力を尽くす精神を意味する言葉だと、日本ではなく台湾で台湾人に教えられた。

果たして、私たち日本人はいま、この言葉に恥じない生き方をしているだろうか。

私は今後も現地の民衆のために生きてきた土木技師・八田與一の生涯を通じて、日本の先人が貫いた素晴らしい生き方を、将来を担う若い人々に語り続け、第二、第三の八田與一が育っていくことを願つてやまない。かつて、貧しくとも誇りを持って公のために生きていた日本人の姿こそが、今日でも全世界の人々に求められている